

Pierre-Etienne Théodore ROUSSEAU

ピエール・エティエンヌ・テオドール・ルソー (1812~1867)



作品名 バルビゾンの庭

種類 ガラスステロ版

サイズ 13×20cm(各)

略 歴

パリの南郊、フォンテーヌブローの森のはずれのバルビゾン村に住み着いた画家の一派をバルビゾン派という。テオドール・ルソーは同派の代表的な画家である。西洋絵画の歴史においては、「歴史画」が常に上位におかれ、肖像画、風俗画などがこれに次ぎ、風景画は一段落ちるジャンルと見なされていた。フランスにおいて本格的な風景画が描かれ、歴史上の物語の背景などではない、フランスの現実の風景そのものが芸術的表現の主題となるには、19世紀前半のバルビゾン派の登場を待たねばならなかった。パリの南方約60キロのフォンテーヌブローの森の東北端にあるバルビゾンの村では、コローをはじめ多くの画家が滞在し制作していた。1830年代以降、この村に長期滞在し、もっぱら風景を描き続けた画家の一群を指してバルビゾン派といい、テオドール・ルソーのほか、ディアズ、トロワイヨン、ドービニーなどが代表的な画家である。『晩鐘』で有名なミレーもこの派に含めてよいであろう。

1812年 パリに生まれる。

1827年 フォンテーヌブローの森を訪ね自然への関心を持つ

1831年 19歳の時、『オーヴェルニュ風景』がサロン（官展）に初入選

1834年 サロン入選作『コンピエーニュの森の開墾地』をオルレアン公が買い上げる

1847年 バルビゾンに移住

～サロンへの入選を拒まれた十数年の不遇時代～

1849年 サロンでは金メダルを受賞。正統派の画家として復活を果たす

1855年 パリ万国博覧会にて彼のために展示室1室が与えられる

1867年 万国博覧会の審査委員長に任命されている

1867年 バルビゾン派の指導者として評価が高くなりミレーとも親交も

深く共に浮世絵に興味を抱いて55歳でミレーに看取られながらバルビゾンで没

～晩年は画家としての名声も確立～